

【科研費応募支援ニュースレターNo.30】 発信日 241207  
タイトル\_第10回 RA協議会参加

教育職員各位

URA 高木敦子

いつもお世話になり、感謝申し上げます。URAの高木敦子です。  
今回は、2024年10月16日(水)・17日(木)に沖縄科学技術大学院大学会場とオンラインのハイブリッドで開催(参加者数:764名、所属機関数:190機関)されましたRA協議会第10回年次大会にオンライン参加したことを書かせていただきます。年次大会の形式は一般の学会の年次大会とあまり変わりません。

以前、ニュースレターNo.11にも書いていますが、RA(リサーチ・アドミニストレーション)協議会(資料1)は、大学を含む研究機関において研究支援業務に従事する人のための団体です(URAとなっていないのは、大学のみならず、研究機関も含まれるためです)。RA業務の向上を目指すことによって、我が国の大学等の研究力強化に貢献し、学術及び科学技術の振興並びにイノベーションに寄与することを目的とし、2015年3月11日に設立されました。今回は10回目の年次大会となります。主にはURAに関わる演題ですが、先生方にもお役に立つかもしれない演題を選んで、ご紹介させていただきます。

(1) 口頭発表 A4セッション『まるっとオープンサイエンス～多様な知と協働する  
URAの視点とは』

「京都大学における研究データ管理とデータ運用支援基盤センターの活動」

小野英理(京都大学 情報環境機構 データ運用支援基盤センター 准教授)

世界的に論文のオープンアクセス、研究データの共有・公開等のオープンサイエンスに対する要請が高まっています。日本でも、「学術論文の即時オープンアクセスに向けた基本方針」(2024年2月公開)等によって、論文のオープンアクセスや研究データの公開が求められています。具体的には、2025年度新規公募分からの科研費等による査読付き学術論文出版後、論文と根拠データの即時オープンアクセスが義務化されました。このような研究データの管理・利活用を行うための仕組みとして、国立情報学研究所(NII: National Institute of Informatics)が提供しているものが、「NII Research Data Cloud(NII RDC)」です。NII RDCは研究データのライフサイクルに即した「管理基盤(GakuNin RDM)」、「公開基盤(JAIRO Cloud)」、「検索基盤(CiNii Research)」から構成されています。

演者の京都大学では、これらも利用しつつ、自機関でもオープンアクセスのための論文と根拠データの公開ができるサービスとして「紅(KURENAI)」を構築しておられます。<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/> 根拠データの収容はまだ、少ないようです。

(2) 口頭発表 A4セッション『まるっとオープンサイエンス～多様な知と協働する  
URAの視点とは』

### 「学術出版の多様性推進 多言語対応オープンリサーチ出版の可能性」

森本行人（筑波大学チーフ URA）

つくば大学が設立パートナーとなり、支援している『Japan Institutional Gateway』という学術誌の紹介がありました。管理は Taylor and Francis 傘下の F1000 Research が行っています。日本語でも英語でもオープンアクセスに対応できる全分野対象の出版システムです。査読も公開後のオープン査読で査読の透明性も図れます。

[https://ura.sec.tsukuba.ac.jp/portal/wp-content/uploads/2024/10/JIG\\_How-to-submit\\_2024\\_Sep\\_Version\\_1.5.pdf](https://ura.sec.tsukuba.ac.jp/portal/wp-content/uploads/2024/10/JIG_How-to-submit_2024_Sep_Version_1.5.pdf)

なお、投稿のためには、提携機関になる必要があります。本学は現在、連携機関になっていないので、投稿はできませんが、このようなオープン査読の学術雑誌が日本にもでてきたことのご紹介まで。

### （3）口頭発表 「あらゆる分野の外部資金申請書を各 URA が効果的・効率的にブラッシュアップする方法」

太田 一陽 准教授 / 副室長 / 認定 URA（筑波大学 研究戦略イニシアティブ 推進機構 研究マネジメント室）

演者の長年のご経験から、申請書をブラッシュアップする手法が紹介されました。この中で、私（高木）が、オンデマンド学内セミナーや面談時に、先生方に強調してお伝えできていなかった点は以下の部分です。

目的達成基準の明確化について。各研究計画に、何をもってその計画の目的を達成できたかと判断するのか(目的の達成基準)が明記されているかもチェック。これは、審査委員が、研究目的を達成できる計画を立てられているかを判断できるようにするためです。

研究分担者を含むときには、役割分担については当然記載しますが、なぜそうするのか(理由：各自の専門分野と役割の適合性や、研究の効率や相乗効果を高める役割分担など)の説明やその研究分担者を入れることによって、どれくらい効果的に研究が進むかを明確に記載するとさらによいです。

### （4）ポスター91 「研究支援体制構築と研究広報 大学時報掲載報告」

佐藤 誠（学習院大学研究支援センター）

学習院大学は令和 3、4、5 年の科研費新規採択率 3 年連続私立大学第 1 位を獲得しています（44.2%等）。この高採択率を獲得できた原因として、次のことを挙げられています。

- ・ 2009 年 4 月から研究支援センターを学長室直下の組織として発足。
- ・ 科研費に基盤研究（S・A・B）の研究代表者として応募し不採択であった教員に、審査結果に応じて科研費ステップアップ研究費を助成。成果として、令和 5 年度に研究費の助成を行った 5 件の内、4 件が令和 6 年度科研費に採択。
- ・ 国際学術雑誌へ投稿する研究論文作成に係る校正・投稿・掲載・オープンアクセス費用を助成。

その他もありますが、特別に際立ってこうすれば採択率が上がるというようなものではなく、小さな工夫を積み上げられているという印象を受けました。

(5) ポスター95 「科学イラスト制作をプロに依頼する – 実例を交えた依頼方法の流れ –」

Chieko Chiwata 他 (京都大学)

京都大学で作成されました冊子、『プロに依頼する科学イラストのススメ』を紹介されています。

<https://ashbi.kyoto-u.ac.jp/ja/archive/visualize-your-science-2024/>

(6) ポスター97 「論文の“アピールポイント”と“読みやすさ”が両立するプレスリリースを作る」

井上寛美 他 (京都大学 高等研究院ヒト生物学高等研究拠点)

演者らの目指す効果的なプレスリリースとは、研究者がアピールする論文のポイントとその社会への貢献が明確で、読者にとって読みやすい構造を持つ文章です。演者らは独自の事前アンケートを作成し、その質問に答えるだけで、論文のアピールポイントと読みやすさが両立する文章構造を自動的に作成できるようにしました。アンケートにより、研究者と広報担当者の連携が容易となり、スムーズなプレスリリース制作が可能となったとのことです。事前アンケートの詳細は不明ですが、読者の関心、背景、アピールしたい点、将来の計画、読者へのメッセージなどのようです。一つのプレスリリースは7~8か所のメディアで紹介されているとのことです。

以上です。

本学 web サイト【研究・社会連携»科学研究費助成事業】ページ内に、科研費の応募支援や研究支援に関する情報が掲載されています。

[https://www.osaka-sandai.ac.jp/research/grantinaid\\_scientific\\_research.html](https://www.osaka-sandai.ac.jp/research/grantinaid_scientific_research.html)  
【ID: kenkyu パスワード : sanken3001】

これからも、科研費申請や研究に関し、情報共有のためメール発信させていただき、なにか少しでも先生方のお役に立てればと願っております。ご不明点、ご意見、ご希望などございましたら、メールで URA 高木敦子 (8atakagi@cnt.osaka-sandai.ac.jp) まで、お伝えください。  
失礼いたします。

資料 1 RA 協議会について <https://www.rman.jp/aboutus/>